

船戸与一

蝦夷地別件

えぞちべっけん

上

新潮文庫

え ぞ ち べつ けん
蝦夷地別件

新潮文庫



平成十年七月十一日発行

著者 船戸与一

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二一八七二一
東京都新宿区矢来町七一
編集部(〇三)三二六六―五四四〇
電話 読者係(〇三)三二六六―五一一一
振替 〇〇一四〇―五―八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦 製本・憲專堂製本株式会社
© Yoichi Funado 1995 Printed in Japan

ISBN4-10-134313-6 C0193

新 潮 文 庫

蝦 夷 地 別 件

上 卷

船 戸 与 一 著

新 潮 社 版

6132

蝦夷地別件・上巻 目次

書簡・前段 9

波の譜 13

地の譜 281

登場人物一覧 4
関連地図 6

登場人物一覧

ステファン・マホウスキ	救国ボーランド貴族団の一員
ミハウ・クラコヴィツチ	同貴族団の指導者
サロモン・トレンヴィツキ	同貴族団の一員
ドーザク	オロツコ人の通訳
ナズナーツィン	ロシア正教分離派・鞭身派の祈禱師
ニコライ・イワノヴィツチ・チュコフスキ	ロシアの皇帝特別官房秘密局六等官
洗元	本草学の心得がある臨濟宗の僧
静澄	天台宗の僧
葛西政信	幕府御家人の息子
葛西政明	幕府の奥右筆、政信の兄
ゴスカルリ	政信と行動を共にするアイヌ
伝七	飛驒屋の厚岸支配人
勘平	飛驒屋の国後支配人
佐吉	旅籠「飛驒屋」の番頭
吉兵衛	飛驒屋の番人
新井田孫三郎	松前藩番頭、松前鎮撫軍・監軍
松前道広	松前藩主
松前監物	松前藩家老職
松前平角	松前藩目附、松前鎮撫軍・副監軍
氏家忠勝	松前藩沖の口奉行

助右衛門	松前藩の足輕、孫三郎の間諜
登勢	孫三郎の妻
ツキノエ	国後の脇長人
セツハヤフ	国後の長人、ツキノエの息子
ハルナフリ	セツハヤフの息子
オベルヨフ	ハルナフリの母
イコリカヤニ	セツハヤフの弟
マツケニ	ツキノエの妻
サンキチ	国後の惣長人
ホニシアイヌ	サンキチの一人息子
モシランケ	国後の長老
キララ	モシランケの孫娘
ハスマイラ	ゲンノカリの妻。洗元と行動を共にする
ミントレ	高台の集落の長人
マメキリ	船着場の長人、サンキチの年の離れた弟
イコトイ	厚岸の惣長人、ツキノエの甥
オツケニ	イコトイの母、ツキノエの妹
シヨンコ	野付嶋の惣長人
ホロエメキ	忠類の長人
キニサツブ	岩鼻の長人
マベルキリ	松前と誼を通じるアイヌ
ドルコエ	国後に住むアイヌの通詞
アラキライ	択捉のアイヌ。ロシア語を解する

蝦夷地別件 上卷

東京都八丈町中之郷・岩本家に保管されている書簡。現代語訳。前段――。

貴僧がまだ八丈島で御健在と聞き、懐しさに打ち顫えるような気分でこの書状を認めます。盲いたままの遠島暮らし、御不自由はさぞかしと推察いたしますが、貴僧の気丈さなら今後も充分に耐え抜かれるでしょう。茶菓などもし島で手にはいりにくい物があれば、役人を通じて御申しつけください。愚僧が差配していかなりとも八丈へ送る手立てを講じます。またこの書状も貴僧のままで読みあげるよう、すでに島の役人に頼み込んであります。

愚僧は十九年まえから武蔵の菊名という鄙にある小寺で侘び住まいをつづけています。足腰は弱り果て、厠に向かうのも億劫な気分です。齒はすっかり抜け落ちました。沢庵は笹掻き牛蒡のようにしなければ食えません。当然でしょう、愚僧はもう九十一歳なのですから。長生きも考えものだときどき思うことがあります。

寛永寺との繋がりはもちろんまだ絶えてはいません。身のまわりの世話はそのから派遣された年端の行かない小僧ふたりが焼いてくれます。それに寛永寺の別当がこの小寺を覗きに来ることも。

いや、こんな話はどうでもいいでしょう。

江戸はいま騒然としてゐるらしい。

二十日まえ亜米利加の黒船が四隻、浦賀に現われたのです。噂によれば、琉球をまわつて相模湾にやつて来たその四隻は鉄ででき、蒸氣を使つて動くらしい。最初にこの黒船が沖合に停泊したとき、浦賀の町は蜂の巣を突つたような大騒ぎになつたと言います。半鐘がけたたましく鳴り響き、侍たちは馬に跨つたが何をどうしていいやらわからず、火消し組もむやみと町のなかを走りまわるだけだつた。女子供たちは泣き喚き、収拾のつかないありさまになつたと聞きます。

浦賀奉行、香山栄左衛門が慌てて黒船に出向くと、四隻を指揮するペリーという亜米利加人は国書を幕府に手渡すから三日以内に段取りをせよと脅したらしい。江戸の町が騒然となつたのはそれからすぐだつたそうです。噂が噂を呼び、大筒の弾が市中に打ち込まれるとか、もつと多くの黒船が押し寄せて来るとか、だれもが仕事に手のつかない様子だつたと言います。報らせを受けて、老中・阿部正弘は戸田伊豆守と井戸石見守を浦賀に差し向けました。ふたりがそこでペリーから受け取つた国書はもちろん修交を求めるものだつた。これは清国と和蘭以外は異国との交わりを禁ずという祖法の変更を力づくで迫まる国書です。

老中・阿部正弘がこれをどうするかはまだはつきりしていません。寛永寺の別当が仕入れた噂によれば、幕閣のなかにはペリーの携えて来たこの国書をめぐつてさまざまな意見が飛び交つてゐるらしい。そのどれもが確たる自信なく、揉めに揉めつづけてると聞きます。しかし、愚僧の勘で言えば、遅かれ早かれ幕府は修交の申し出を受けざるをえないでしょう。蒸氣で

動く鉄の船。このまえには祖法を守り通せるはずありません。

それにつけても、愚僧は貴僧とはじめて御逢おあいした六十五年まえのあの地が憶おもいだされま
す。異国にたいする日本という国家。それがいまのようなかたちを整えはじめたのは愚僧と
貴僧が六十五年まえにあの地で見た一連の動きと深い関わりを持つてゐる。そんな気がしてな
らないのです。

波の譜

天明八年戊申七月 西曆一七八八
年九月 シャクシャイン戦争後一
九年わずかに葉の落ちる月――

紅毛書にて考へるに、露西亞の日本交易を好むは數十年以前よりの趣向と見ゆるゆゑ、いかやうなることをしても交易すべきの心ありと思はるるなり。……この辛便を以つて日本の富榮えんことを求むるに、とにかく蝦夷の出産物を吟味するにしくはなし。

工藤平助『赤蝦夷風説考』より

1

ちぎれ飛んだ波^{ヴァルナ}しぶきが北からの強い風^{バゴウダ}に煽^{あお}られてひっきりなしに頬を叩^{たた}いた。真つ黒い雲が上空^{ニヨリバ}を走るように動いているが、まだ雨^{ドイシシ}が降つてゐるわけじゃない。それでも吹つ飛んでくる塩水に髪はもうずぶずぶに濡^ぬれている。その雫^{しずく}が首筋に伝わつた。帆を下ろしたシチーク船エレナ・ブラジエンスカヤ号は激しく浮き沈みし、せわしく左右に傾^{かた}ぐ。しかし、オホーツクの海がどれほど荒れようと、いまはどうでもよかった。船全体がときどき鈍^きい軋^しみ音を立てる。龍骨^{キリ}と船底外板が引き剥^はがれるような音を。船底に何が生じようと、それもどうでもよかった。

ステファン・マホウスキは左舷の船柵^{ふたきく}を両手でがっちり攔^{つか}んだまま、甲板^{ダスカ}のほぼ中央で向かいあつてゐるふたりをじつと眺めつづけた。他の乗組員たちも動こうとはしない。それは氣配でわかるのだ。だれもがボリス・シャピーリンとセルゲイ・コルサコフだけを見ている。風の音にまた船底の軋^はみ音が混じつた。マホウスキは船柵を攔む腕に一段と力をこめながら、早く殺^やれ早く殺^やれと肚^{はら}のなかで呟^{つぶや}きつづけた。

ボリス・シャピーリンが何か言つた。だが、それは風の音に掻^かき消されて聞こえなかつた。